

第十三回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

稲賀 繁美 著『絵画の東方 オリエンタリズムからジャポニスムへ』
(1999年10月30日 名古屋大学出版会 刊)

稲賀 繁美 いなが しげみ 昭和32年(1957)生まれ。東京都出身。専攻は文化交渉史、美術思想史。東京大学大学院比較文学比較文化課程単位取得退学。パリ第七大学博士課程修了。新課程文学博士。国際日本文化研究センター助教授(受賞時)。現在は国際日本文化研究センター教授。著書は、『絵画の黄昏』(サントリー学芸賞・倫雅賞・渋澤クロード賞)、編著に、『異文化理解の倫理にむけて』、『伝統工芸再考・京のうちそと』、執筆分担著に、『比較文学比較文化4 東西の思想闘争』、『異文化への視線』、他がある。

受賞のことは

ラフルーアさんやオームス教授の業績をきちんと評価したのは、和辻賞の大きな見識だと考える。だが、日本の研究者の仕事が列島を越えて、世界で評価されることも大切だろう。その点、今回の受賞対象となった仕事を単刊書として欧米語でまとめられていないことに、自分の限界を感じている。

日本の哲学者が戦前に多く滞在したハイデルベルクで、二ヶ月ほど講義をした。その内容の一部が今回、受賞の対象となった論考である。和辻哲郎と竹山道雄、今道友信氏との交遊なども、当地で改めて読み直し、「知識人の責任」ということに改めて思いをいたした。日本国内しか視野に入らぬか、逆に「宗主国」カブレの近年の日本の大学教員に対する違和感が、ドイツ滞在で改めて頭をもたげてきた。と同時に一個の人間の能力の限度というものにも、不惑を超えて、感うことが多い。

《選考委員評》

たのしい選考

陳 舜臣

稲賀繁美氏の『絵画の東方』は浩瀚な論著である。しかも叙述は細密にわたっている。だから本書を辞書的に利用することもできる。本書を構成する六章と補章のタイトルを読むだけでもたのしい。

「オリエンタリズム絵画と表象の限界」「透視図法の往還」「ジャポニスムと日本美術」「幻想の合わせ鏡」「失楽園の修辞学」「表象の彼方へ」「画家に棲まう美術史」である。

この六章と補章は、それぞれ独立しているようにみえて、実は一本のふとい流れにそそいでいる。

それは巻末にある「初出覚書」一あとがきにかえて、を読めばわかる。そして巻首にある、「(本書は)きたるべきモダニズム批判の前哨としての位置を占めることになる」という宣言と首尾一貫している。著者によれば本書は、三部作構想の第二部であるという。

大学のころから(本書第二章「透視図法の往還」は著者の学部卒業論文が原型となっている)、定まったテーマをもち、孜々として研究を続けてきた息の長さに、敬服するほかはない。

また彼の研究視野には、日本のみならず、中国の豊子愷の翻案「谷訶生活」(「ゴッホの生活」)まで入っている。豊子愷は日本に留学し、「源氏物語」を最初に中国語に訳した人でもあるが、文革中に迫害されて死んだ。彼をとりあげることは、一種の鎮魂になるのではあるまいか。なお彼の師の李叔同は、本書にもあるように豊に美術の手ほどきをしたのである。李叔同は上野で絵画だけではなく音楽も習った。戦時中に死んだが、晩年は出家して弘一法師の名で知られている。

八年前、中国の文人で画人でもある馮驥才氏から、日中合作の映画を作るなら、主人公は弘一法師だという話をきいた。

『絵画の東方』を読みながら、そんなことを思い出し、たのしい選考であった。

梅原 猛

今年の和辻哲郎文化賞（一般部門）は、多少の議論があったが、稲賀繁美氏の『絵画の東方』に決定した。まず順当なところであろう。

比較文化という学問ができたのがそれほど古くはないが、この稲賀氏の作品は、歴史をもつ比較文化という学問のみごとな成果といえる。比較文化という学問もここまで発展したかと感慨を深くした次第である。

この書を一読してまず感じられるのは、稲賀氏の驚くべき勉強ぶりである。浮世絵がどのようにヨーロッパに輸入され、それが印象派の誕生にどのように影響したかを稲賀氏は実に克明に描き出す。そしてそれに関する英語、フランス語、ドイツ語、日本語、中国語のあらゆる文献を実に精力的に読み、引用された文献の文章をつなぎ合わせて、興味深いストーリーを作り出す。しかもところどころに著者の創見がきらきらと光っている。この著書は甚だ首尾一貫した体系をもつ大著であるが、細かい部分をも著者は決しておろそかにしない。

しかし私にはいささか注文がある。それは比較文化という学問のせい、稲賀氏のパーソナリティのせいかは分からないが、たとえばゴッホについても、たとえばセザンヌについても、稲賀氏がどう思っているかという独断的、あるいは独創的な意見がほしかったように思う。稲賀氏は自分の考えを引用文の羅列によって表しているが、もっと大胆に自分の説を語ってもよかったのではないか。稲賀氏の歌うアリアを聞きたかったと思う。

中野 孝次

今年は候補作五点のうち断然これ一冊というものがなかった。どれも甲乙つけがたい感じで、その中ではこれがいまいかと思った『日本の川を甦らせた技師デ・レイケ』をわたしは推した。

著者は明治年間に木曾川を初め日本各地の川の治水に大成あったオランダの土木技師デ・レイケに興味を持ち、建設省を定年退職後もっぱらデ・レイケの事蹟の研究に専念する。遺された文書を読むためオランダ語の学習から始めたというのだから並々でない。

デ・レイケは今日のようにただ兩岸をコンクリート化して、強引に自然をねじ伏せるような土木工事はしなかった。自然を見極め、最も自然の理に叶った工法で川を正した。そのやり方に魅せられたからこそ、みずからも河川事業に携ってきた著者はデ・レイケ研究を始めたのだと思われる。

そこでわたしはこれを推したのだが、陳、梅原委員はそれぞれ別のものを推し、賛同は得られなかった。といって両委員にもとくにこれと主張したい作品があったわけではなく、消去法で消してゆくうち、稲賀繁美『絵画の東方』が、その篤実かつ熱心な博捜ぶりを買うことにして授賞作に決った。

事実これは、著者の文献、絵画、歴史的事実への打ちこみ方は並大抵のものでなく、まことに徹底していて、学術論文としては申し分ない、とわたしも判断した。近年これほどきまやかな論文はめったにない。

が、注文もそのところにあつて、何のためにこういう主題に取り組むか、誰に向って書くかがはっきり伝わってこないのが、問題だと思われた。著者自身の美的体験がじかに語られることも少なく、文献の引用によりかかりすぎていゝる。それらの点は今後の課題として残されるだろうが、今年の授賞作に値するとして三委員の決定を見たのであつた。